

はないのか。

組紐は太古からの尊い文化の贈りものである。

一本の紐がなかったなら、この地球上に人間は存在しなかったかも知れない、寒さをしのぐ衣服も、狩猟の道具に、運搬に組紐は必要欠くべからざるものであった。組紐を歴史の彼方に消え失せることはできない。我々はあくまでも大切にこの文化を次の世代へ受け継がなければならない。そして組み続けてほしいものである。

参考資料

くみひも 曼陀羅まんだら、組紐の歴史教本等

津軽弁 村の笑い話」

「噛み合わず」

先日、土手町のクリーニング店に、でかけました。出てきたのは、眼鏡のよく似合う、丸ボチャの奥さんでした。「いま、セール中だが」私は奥さんに尋ねました。「もう、三年前に終りしたね」「へば、いま、やってねえだが」「奥さん、にぐらど笑い、「やっっているよ、週に三回だけ」

(森平)



「六歌仙」「春夏秋冬」等の帯締

権現崎伝説とお岩木さん

山中 長三郎

(1) 権現崎の岬にて

嘉瀬奴橋三三九号線を出発し、小泊村下前に着いた時は車のメーターは四十二キロを走ったことを表示していた。朝日が築港内に浮き屯う漁船を照らして静である。

小泊岬・海抜二百二十九メートル、断崖絶壁の奇勝で、一帯は津軽国定公園に指定されている。頂上部に龍飛権現を祀る尾崎神社が建つことから別名・権現崎ともいう。

今日はこの権現崎の頂上に登る予定であるが、私は七十四歳老妻も六十七歳老齢の二人である。築港の先は徒歩による道であったのが今は立派な舗装の自動車道になっていた。

駐車場は上段と下段の二ヶ所にあり上の駐車場に車を止め置き山頂を目ざし登り始める。小丸太で土留された階段を一段一段と登って行きましたが果てしなく続く。

百廿ごとに小標木が立ててある。三百廿を示した小標木の所

で草花を手にした、六十歳程の女の二人連れが下山するのに逢う。頂上はまだ遠いのかと、ききますと、途中より引返したとのことである。

樹木の枝葉が道筋を蔽って日陰続きでありがたかった。飯詰出身の老妻は敗戦まもなく、青年団の一員として金木駅下車、金木営林署・貯木場より軌道車「トロッコ」に乗り、今泉で下車し、それより徒歩により小泊港の沿岸の山道を登り権現崎頂上まで登ったという。

日本海と奇山との折合う風景あり、途中に元海軍要塞の砲台の跡が見られたそうである。津軽海峡及日本海を通る敵艦への備えて旧軍国日本の明治―昭和の敗戦まで続いた要塞とされる。

私は権現崎に登るのはこれで四度目である。戦時中は中里駅に下車して仲間同志が、何事も戦地の兵隊さんにくらべて、歩け歩け行軍のまねごとをする。

敗戦後に嘉瀬村の某氏の無蓋の貨物自動車、あるいは三輪車

であったかも知れぬ、今となっては記憶はうすれて定かではない。

ようやくにして下前部落を真下に見る曲りくねった急勾配の崖畔の道筋に來ると、車が古いのか、悪路のためなのか、それとも、運転手の未熟のためなのか、此の先は自動車で行くのは危険であるといわれ、そこから下車歩くこととなった。

当時は権現崎頂上に登るには谷間のごろごろの岩石を渡り歩き頂上の岩崖の奇景を見上げ登った記憶がある。半世紀前の若者時代のことである。

現在は山の中に道筋ができ道筋は樹木の枝葉に蔽われ日陰である。土留めの階段もできていて、半世紀前に比較すると大分楽な道筋の筈であるが、老いの二人には体にこたえる坂道であった。

老妻はもう、疲労困憊した様子になり、まだまだ続きそう段々道である。疲れた妻におやつ・水筒を渡して此の場に休ませ私の帰りを待つことにする。

私は頂上を目ざし、階段のある坂道を更に登り行くこと四百メートルの小標木と続き、老妻のことも気になりながらも前進して行くこと五百メートルの小標木で階段は終る。

あとは平坦地のような道なのである。

走るような足どりで一気に拝殿まで登り着き神社の拝礼も早々に帰ると、妻は最後の段まで登ってきていた。私は再び頂上に妻と共に沢や樹木を眺めながら頂上まで行く小標木は九百メートル



いわれる。「尾崎氏は徐福の子孫という伝文もある。」

又紀州熊野を始め、富士山麓など、二千年前の大昔の徐福伝説は本州の各地に点々と伝え語り継がれてあるが、最果ての津軽権現崎にも、古くから徐福の上陸地点として半ば信じられ、中世から近年にかけて海拔二百二十九メートルもある権現崎の頂上に神仏混淆のお堂なり祠なりが、入れ代り立ち代り建立され今日に至っている。

明治以降、神社の周辺で宝探しの盗掘が続けられ、徐福の神像・宝剣を始め経石等も出土したとも言われる。

秦の始皇帝の使者として不老不死の霊薬を求めて、東海の蓬萊山をめざして大船団を仕立てて船出したとは、前八世紀頃

終っていた。展望台に登ると二百二十九メートルの断崖絶壁の真下に漁舟二〜三艘が小粒のように見える、白い小舟が浮いている。

高所恐怖症に近い私には長居は無用である。老妻は周囲の絶景を眺望、大島小島を探している様子である。私は早々に下に降り神社の標示板を見ると次の事が書かれている。

「平安時代大同二年（西暦八〇七年）建立」となっている。そのころ修験者の聖地として、山全体が権現としてあがめられ、飛龍大権現を協祭神、脇士に不老不死の仙薬を求めてきたという徐福が、船海の神として祀られこれ飛龍宮と称した。

明治初年の神仏分離で祭神を伊邪郡岐命・伊邪美命として、神号を尾崎神社と改称する。」「祭り日、八月一六日」

(1) 小泊権現の伝説と流着人

小泊崎のことを権現崎とよんでいる。どうして権現崎とよぶのか、土地の郷土史家の話してはこの先端の頂上にある尾崎神社には、明治十年以前まで竜飛権現が祀られていたので、そうよばれるのだという。その竜飛権現はいま紀伊「和歌山県」の熊野神社の御神体になって祀られている。

どうして御神体が移ったか、それについては「竜飛権現が飛んでいった」と伝えられているだけだ。昔、尾崎神社の別当尾崎坊は「御神体が、飛んでいった紀伊の熊野神社の格式が上だったので、こっちが本家格なのだ、神事を行うときはこちらから出向いて奉仕した。」と言ったという、伝説がのこっている

(縄文文明) — と史記に書かれている。

又文献で確認できるとする鎌倉中期の元の来寇で神風(颶風)で押し流された元国の難破船が権現崎、古称、尾ノ崎に流着していること。この中国難民達の中から徐福を我々と同様に、流着したのだとの語り草が根付いたのではないかともいわれる。

徐福船団の一船なり二船が漂着した可能性もある。

現在その当時の遺作らしい徐福神像とも思われる御神体が市浦村の洗磯崎の神社に奉られてあること。元寇の鎌倉期の作と見られる中国貴人像(極彩色)の木像が、小泊村の旧家から発見されて現存しているといわれる。

熊野水軍、伝説の徐福信仰が、中世十三安東水軍が権現崎に水軍の守り神として祀った。(古代史あおもり奈利田浮城著)

二度と訪れも叶うまい老夫婦の二人頂上を下る。

下の段の駐車場にはキャニオンハウスがあり小泊特産、旬の魚介が堪能できる。

ハウス脇に一艘の模型船がかざられてあり、昔の安東船かもしれない、私には舟のことは無知である。

上の駐車場に徐福上陸伝説の高さ三メートル余、幅四十センチの標木があり、徐福碑文「徐福は今から二千二百年ほど前、中国を一統した秦の始皇帝に仕えいての命令で「日本国」東海島の蓬萊山にあるという不老不死の仙薬を求めて津軽の権現崎に上陸した」の標木寄りの日本海上は、細波が紺碧色にあかるい。

ここから眺望する岩木山は十二単衣の女人の姿となって蜃気

楼のように遙か南の海上に映えていた。

だが、まもなく始皇帝は世を去り、同時に徐福も忘れられた存在となった。ところが、中国では忘れられたはずの徐福は、日本ではさまざまな場所で渡来伝説を残しているのである。

徐福が目指したのは霊峰富士ともいわれ、富士吉田市には徐福の墓があるといわれ又佐賀市には徐福の手洗井戸も残っているという。なかでも和歌山県新宮市に残る徐福伝説は名高く、徐福が求めたという不老不死の薬草はもとより、蓬莱山まで存在しているのである。一部には徐福英神武天皇説まであるという。

西暦一九八二年に中国で徐福の出身地が発見され、伝説上の人物から実在の人物としてクローズアップすると、

始皇帝の命を受け「神仙の術を使う人又道教ともいう」方士の徐福は「史記」では徐市とする。数千人の童男童女のおの五百人・またはおのおの三千人と五穀の種と百工を数百隻の船に分乗して東海の島に不老不死の仙草の育つ蓬莱山をめざして旅立ったのは紀元前二一九年のことである。ここに私なりの、想像を書くのでお許し下さい。徐福の一部の特に権現崎に上陸され日本海に浮かんでるように見える岩木山秀麗な姿を眺めて蓬莱山と思われたであろう。

その一行の内の数人が岩木山をめざして、不老不死の仙薬草を探し求めに行き、残った一行も権現崎で幾く年月となくお祈りする内に岬一帯が聖地となる。

ルートは台湾や南西諸島の島伝いに北上、主にこの二つのルートにより九州の福岡や長崎、佐賀などの遺跡からは水田の跡や炭化したモミが発見され、又近畿地方にも似たような形跡があるといわれる。

稲作の日本列島を南九州を北上、冷寒地方、津軽の田舎館村に至るまでの陸地ルートは進行速度・海上ルートにも又色々となつて疑わしいという考古学者もある。

徐福一行は始皇帝より多額の金品・五穀の種・稲の種含む百工・鉄器の作る人も含む。数千人の童の男女と共に数百隻の船に分乗して蓬莱山（日本と思われる）に仙薬を求めて旅立ったと司馬遷の史記「淮南衡山列伝」に記されている。

徐福一行の船は遭難にあうも日本各沿岸地に上陸の伝説があり、権現岬の碑文のように徐福一行の幾人か上陸されて岩木山との二ヶ所に住み付き稲作や葦の根から微少の鉄分を取り鉄器も作り、先住民との共存となり、文化・文明を津軽に広げたのだから。

又古代日本の本の中に「はるか古代において徐福が八丈島に上陸して王国を開いたという説もある。

徐福が捜し求めていた蓬莱の薬草というのは、実は八丈島特産の『明日葉』だったというのだ。徐福が上陸して国を建てたという伝説は他にもある、ざっとあげてみても肥前佐賀・安芸・尾張熱田・秋田男鹿半島など全国に十ヶ所近くの言い伝えになる。権現崎の帰路の途中、雄の温泉に浸り岩木山を眺望

岩木山に行かれた一行とは往来はあったろうが仙薬草は求められず、仙薬草が手に入らぬ限り故国（支那）にも帰ることが叶わず。

年が経ると善男善女も老之疎遠となり、岩木山に住む人々と権現崎に住む人々に定まる。

津軽一帯に萌生する葦の根より「又は岩木山麓西丘陵地は燃料の赤松又原料となる七里長浜の砂鉄」鉄分を取り農器作の形影もあり、舟造り、信仰・又各技術共に育ち、のちの津軽王国の基になったのではないだろうか。田舎館村に垂柳遺跡の発掘、遺跡は約二〇〇〇年前弥生時代のもので六五六枚もの整然並んだ水田跡が発見され水田表に弥生人の足跡も多数発見される、稲作造りの確実となった頃に発掘現場を木立民五郎、山中正津、秋元惣之進等と共に発掘中の現場を見学する。係員の説明では考古学者等は、弥生時代の稲作の遺跡が津軽に現れ、学者もとまどいぎみで度々この現場に現われて頭を捻って見学されるという。

「静岡県登呂遺跡の水稲耕作・近畿の稲作にやや遅れ、同じ弥生期の、森雪寒冷地の津軽の稲作には学者等も信じられなかったようである。

現在の稲作の伝来ルート説は大きく分けて、米の原産地はインド東部のアッサム地方から中国南部にかけての高原地帯とする説が有力。ここから楊子江沿いに伝わっていったと考えられており、中国の楊子江の近境より、北方ルート朝鮮半島と南方

しながら徐福伝説を推考する。温泉場を出発脇元の東方向にアラバキ王国時代岩木山をモデルに築かれたと言い伝えの山が見える。

車は市浦村の相内大野福島城・相内高館の唐川城。又小高森の中に山王坊跡のある日吉神社にふるさとを探る会員一行と共に昭和六十年に参詣したことがある山王坊はいまは杉林の中に小さなお堂があるばかりだが、鳥居が二十幾つ参道に立ち並んでいる。

一番手前、日枝山王鳥居で風変わりである「神社寺院跡。中世」この辺一帯は津軽三千坊のうち十三千坊のあったところと伝えられている。境内には懸伝や五輪塔の石が見られる。

ふるさとを探る会の一員として訪れた時は道路も悪く国道より入り途中より歩いた。今は神社前に駐車場あり舗装路になっている。現在は国道添いにも風変りの日枝山王鳥居が建つ人目に付く山王鳥居は、柱の上に支輪があり、笠木の中央に芯柱をたてて合掌形の破風をかけ、鳥頭（からすがしら）とよぶ反りを見ることによってあきらかだ。

この歴史をさぐればおそらく一巻の本にもなるだろう。

周りの丘陵には堅穴郡が散在し、石器時代の遺跡や出土品も発掘されるから、地勢からみても先住民にとつてめぐまれた場所であつたらう。

農耕が発達しない時代は、山野の狩猟と海辺の漁撈が彼らの生活基盤であつたとすればこの地勢が絶好だったと想像され

る。いまから八百五十年前の、康和三年（一一〇一）藤原秀榮が、相内の大野に福島城を築き、海上交通の要港となった。

その後、藤原氏から安東氏、さらに南郡氏、そして津軽為信が南部氏を駆逐して津軽を統一するまで、いくたびか勢力の交替が行なわれた。

しかし今から六百二十三年前の興国元年（一三四〇）八月、大津波によってこの地帯が潰滅、福島城下の町と外港十三は陥没して大半は湖底に沈んでしまい、城郭や寺社はほとんど破壊されて、跡かたもなくなったといわれる。

だがその後、奥地の良材が積み出されるようになり、ふたたび昔の活気がよみがえった。津軽藩ではここに奉行所をおき遠見番所や藩の御蔵を設けた。

藩政時代から十三の人々は十三町と称していた。合併で市浦村となったので今は部落だ。それで「町」から「村」そして「部落」におちぶれたとこぼしているという。（『流転の歴史』より）ここまでは新津軽風土記・船水清著の一部分抜粋。

唐川城跡に行き展望台の眼下界は原野・牧場・採草地・山王坊跡の森・相内部落の家々・福島城の森・大沼・遠方には十三湖・十三橋・岩木さんと又北に権現崎、南は七里長浜も一望できる名所である。

奈良—平安時代の築造の跡とされる福島城は国道沿いに立つ標木より南にちよつと入ると近年築造の楼のある簡略な城門、両側に土塀と浅い堀がある、門を通ると右手に福島城の標木と

地を追われるのである。江上波夫博士が昭和三十年に行った発掘調査では、城址の規模は二万五〇〇〇平方メートルあり、東北地方最大スケールだそうである。

遠く大陸にまで雄飛した海の冒険者、伝説の福徐、縄文の堅穴群、古城跡・津軽王国の夢含む地、聖俳人とうたわれる芭蕉の訪れも叶えられぬ奥津軽の地、岩木山の秀姿を眺望し、ふるさとの俳人・歌人・詩人等よ傑作をよんでみませんか。

古跡の福島城を去り、国道三三九号線添いに牛の放牧が広がり及び、トーサムグリーンパークが平成九年四月、道の駅十三湖高原としてリニューアルした。

牛の面の八口で可愛らしいレストランが目につく。この高原を下ると十三湖岸辺の国道で、今泉村落に入る。小公園に吉田松陰遊賞之碑あり、湖の浅瀬に親子連れがはしゃぎなしている。

車が入っている国道添いの村落も三三九号線も昔むかしの岩木川や各河川の土堤の整備のない頃は湖の水面であり、湖の広さも又尨大であった。「新津軽風土記」によると、尾別の湯島、高根の黒崎、今泉の唐崎、薄市の昆布掛こうした地名は、以前十三湖がもっと大きかったところ、その湖岸の名残りだという。

福島城跡につづく今泉や薄市は古くから栄えていたらしい。いま金木にある雲祥寺、中里町の弘法寺などは延宝（一六七三）のころ、ここから移転している。

川倉の賽の川原の地蔵尊も今泉の唐崎から享保年間に移った。ここのお堂町とよばれるところに宝塔がのこっていて、仏骨堂

老木があり、昔ながらの小石の供養塔に真新しい供物も供えてあった。何年前かに訪れた時は老木も大木であり、国指定史跡・松山安東氏城館跡・国清寺跡と書かれた高い標木が建っていた。城門も堀も整備され変貌している。

門内は広い原野である。南に進むと実取遺跡（十三湖と岩木さんも望める。）西に進むと蛇石遺跡の堅穴群、共に縄文・奈良・平安期とされる。

この倉庫の中に古代の生活といたの戦歴が秘められている。市浦村は何と言っても十三湖で有名だ。この湖は周囲三一・四キロ、面積二〇・四九平方キロもあって大きい、最大水深でもわずか三メートルの浅い湖である。

もとは十三湖がたとよばれたが、いつからか十三湖とというようになった。中世には十三湊とさといわれて日本の「三津七湊」のなかに数えられ、北国第一の港町であったことは、古い歴史をみると安東氏の本拠地、十三湊を中心とする津軽半島にあった。

鎌倉末期には津軽半島一帯の支配を確立。正和年間（一三一二—一六一）には福島城を築城する。この城は「あたかも秦の長城を彷彿とさせる」とまで言われるほど大規模なものであったという。鎌倉室町期に絶頂期を迎えた安東氏だが、大津波による、十三湊の潰滅と南部藩の陸地帯の攻めに遇う。陸戦の得意でない安東水軍は小泊の柴崎城を最後に松前に敗走し二度と安東氏が津軽を回復することができなかったという。

そして又南部氏は天正十二年（一五八五）為信のためにこのか供養塔が由緒ある人の墳墓と伝えられている。

土器や石器では深郷田部落の丘陵地からも、たくさん掘り出されている。ここからは縄文前期の土器が出て県内最古のものとして評判になった。いまの平坦地がまだ湖水であった当時、この丘陵の通りは先住民の居住地帯であったのだろう。湖水が深く入り込んでいたことは、いまでは定説になっている。

それから、この小泊街道は、津軽三十三霊場札所の順路でもあり十四番は尾別、十五番は薄市、今泉十六、相内十七、小泊十八とつづくのである。

津軽藩では慶長十五年（一六一〇）にはじめて、領内で鉄をつくったと伝えられ、その場所は今泉と東郡の小国（蟹田川上流）の二カ所だという。

それから二百五十年後の安政六年（一八五九）に、鉄工明珍重吉という人が再び今泉で製鉄事業をはじめている。

明珍重吉は長崎で西洋式製鉄法を研究し、今村万次郎という商人がこれを援助して、良好な成績をあげたので藩ではその翌年頃、用人楠美庄司を奉行にして事業を拡張し、明治までつづけられた。

国道より五キロメートル程奥の、今泉国有林内の母沢開拓地あたりである。以前には所々に鉄滓が積んであり、七里長浜の砂鉄が原料であって、砂鉄は船で運び、十三湖から今泉川をのぼって舟場に揚げ、さらに馬で運んだもの。

ここでの製鉄事業は明治初年ごろ廃止になったが、その後明珍は弘前に移って、鉄工所をやっているという。それから、土地の人の自慢がもう一つある。それは森林鉄道だ。青森大林区署（営林局）が青森〜喜良市間に全国最初の森林鉄道をつくった。木材運搬用である。

工事は明治三十九年にはじまり、同四十二年（一九〇九）に開通した。そして青森貯木場のある沖館を起点とし内真部、蟹田、今泉、喜良市村に事務所と停留所が設けられた。

それまでは、この森林地帯の木材は十三港からの船による輸送によっていたがやがて鉄道に切り替えられ、十三港が急激に衰微した原因の一つでもある。当時は五能線もなく大釈迦まで行かなければ汽車に乗れぬ時代であった。川部と五所川原間の陸奥鉄道が開通したのは大正七年。

何しろ住民のほとんどが汽車を見たことがなく大変なさわぎであったといわれる。

日本三大ひば美林が中山山脈より薄れ、森林鉄道も撤去されトラックの時代と変移する。

車は広域農道の金木川橋を渡ると、私の田も見える、農に生れ農をもって子を養った者にとって一日たりとも、作田の見回りのおこたりはできない、三ヶ所の田の見回りを終え眺望する、岩木山の麓は霞み、茜色の空に浮んでいる。人に例えるとよそ行きの装いの姿である。岩木山は農する者にとっても漁する者の天気予想も岩木山だったろう。朝夕の田ん圃の往来には雲の

掛り具合を見て天気の予想をし、今日の仕事のこと明日の予定の仕事をきめ、春の岩木山の雪解けの山姿を見て、農作業も進めたのである。東風の吹き続きの時は中山山脈に掛る雲具合を見て予想する。農する者にとっては日常においても山は欠くことのできないありがたい存在であった。

(2) 岩木さん

イギリスはロンドン生まれの作家アラン・ブースは岩木山を、こう評している。聖なる社が置かれる背景として、これほど申し分のない場所があるだろうか。

長い石だたみの道の突端にひっそりと建つ社殿の真うしろには輝ける巨大な岩木山がそびえている。道はまっすぐですがすぐに登り坂になっており、どこにいても、お山の頂きに目が引きつけられる。鳥居をくぐってもゆるやかな曲線を描く太鼓橋を渡っても、二列の黒いスギの巨木が空をすませ、山頂が徐々にその姿を没していくのに気づく。

やがて、だんだんに大きくなってきた社殿の鋼鉄を思わせる灰色の屋根にかぶるのは雲ばかりとなる。格別好ましくなったものが近づくにつれ姿が消してしまふ。岩木山は、今きた道をひき返し歩き始めた地点である門外に立たないと、ふたたび社殿の上にそびえてくれない。

岩木山は津軽富士で通っているように、岩木山神社は「北の日光」などと呼ばれることがある。岩木山のおごそかな威厳が

日光の神社のけばけばしさとは似ていない。

日光東照宮は、徳川初代将軍、家康の霊を祀っているが岩木神社は、独裁者を祀ってはいない。御神体ということになってるのは、お山そのものであり、聖なるものの最たるは、山の頂きを四時間かけて歩くことである。



ここは八世紀の末に創設されたが、往時と同じく現在も、神の家というよりは道標であり道しるべである。

神霊がまぢかなところにおわすのだということを、木と草葺き屋根の社で示しているのだ。この外人さんは岩木山は日光よりけっこうと誉めているようだ。岩木山は津軽のシンボルである。標高一六二五メートル、津軽の人々はこの山を父

にたとえ、岩木川を母になぞらえる。そして岩木山の守り神は神社にある。「岩木山全体的には、さまざまな神仏が祀られ、沢山の伝説があり、安寿と厨子王の物語りもその一つであるが、ご本尊は山自体にある。拜殿、楼門、本殿、奥門はいずれも国の重要文化財である。いまは岩木山神社とよばれているが、藩政時代は岩木山三所大権現といい、別当には岩木山光明院百沢寺をおき神仏混淆で、百沢寺には寺領四百石を与えていた。

しかし明治初年の神仏分離により、寺院と神社がわかれることになったため、寺院は廃され、津軽総鎮守、国幣小社岩木山神社と改められた。天正十七年（一五八五）正月八日の岩木山大噴火によって、それまでの建物は壊れ現在の物はその後信、信枚、信政と歴代藩主が建立、整備されている。私も岩木山神社の境内の涌水で水垢離をとり夜中、わらじばきで、

『祭儀祭儀 同行斎儀』

御山に初田饗 金剛堂さ

一々名告拜 南無婦命頂来』

を唱えながら山頂に登り、

意味は神様の御前に、身心を浄めて参りました。今年の収穫を捧げに参りました。お宮に一人ひとり、全身全霊を捧げて感謝いたします。

金剛堂の神に「ハヂ、来たじゃー」と呼び告げて、御来迎（日の出）を拜んで山頂で買い求めてのまれたお碗での熱い汁の味は忘れられぬ。当時はポットはなくビンに水を詰め込み持参する。岩木山もリゾート・ブームに乗り、岩木スカイライン、鯨ヶ沢スキー場、その他の施設も発展している。六世紀に岩木山に噴煙ありの記録もあり、六世紀以前の石器人、縄文人、大和